明治四十一年

別府温泉繁昌記　五

日本一の蒸湯

菊池幽芳

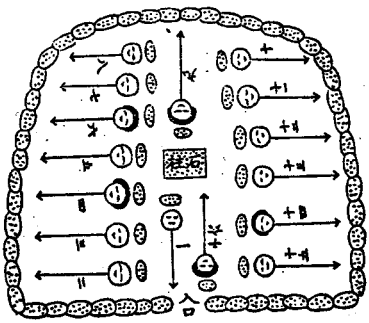
▲半日待ねば入れぬ—六百年取出されぬ十六の石塊

鉄輪の蒸湯に一遍上人の蒸湯といふ。石で囲んだ蒸風呂であるが、別府温泉を知るものはまだ必らず鉄輪の蒸湯を知るほどに有名なものである。

若し夫柳が芽ぐみ桜の花が笑って湯治客の出盛る頃となると、この蒸湯はさながら戦場のやうな混雑を呈する。二三時間から半日も待たなければ入る事が出来ないといふのを見ても其繁盛を思ひやることが出来やふ。併しいくら混雑しても半日も待たされる理屈はあるまいといふと、驚くなかれ、この蒸湯には一度にたった十六人しか入れないのである。仮に三百人の男女が詰めかけたとして、一人で十五分間中に入ってるとすると、最終の人は凡そ五時間待なければ入れぬ事になる。だからみんな二三時間は当然待つものとして詰かけるので、誰も敢てこれに苦情をいふものがない。

併し面白い事には鉄輪のお寺から寺札といふものを出す。この寺札は誰でも冥加金を収めれば買い取れるのだが、併し一日に八枚と極って、それより以上はどれほど冥加金を積んでも出さない。この寺札を持って居るものは順番を待たずにいつでも蒸湯へ入れる権利があるのでその利益広大なるものがあるからこの寺札を買ふために毎日一騒動が持上がる。よっぽど巧く手を廻わさなければ滅多に手に入る事ぢゃないとは、なるほど合点のゆく話だ。

この蒸湯の中には十六の石塊が放込れてある。十六の石塊には六百年の歴史が刻み込れてある。六百年来嘗てこの蒸湯の中からこの十六の石塊を取出したものがないのだ。十六の石塊は十六の枕に外ならぬ。蒸湯に入った十六の男女は必らずこの十六の石塊を枕として寝るのである。十六人以外には殆んど子供一人入る余裕がないのだ。六百年前に手づからこの十六の石塊を放り込んだ人



は誰か。乃ち一遍上人その人であるとの信念は牢乎としてこの蒸湯に入る善男善女の頭を司配している。十六の石塊はこれを十六善神に形どる。中央の石の柱は薬師に形どり周囲に石塊を積む事その数一百十二、三十二相八十種好を表はす。これぞ一遍上人鉄輪地獄を封じ、日本随一の蒸湯を開かれたその時その侭の姿ぢゃ。

▲奇なる入浴の方法—不思議の制裁

蒸湯の説明は大略済だが、その実これはお寺の坊さんから聞たのだ。尤も縁起にもその由来はある。坊さん頗る話上手で、更に蒸湯に入るについて遊行上人の定めた掟といふものを話して聞かせる。この掟は永世変更あるべからずとあって、今でもその通りに実行されて居るのだといふ。又その通りにしなければ十六人どうしても入れぬから自然上人の掟を守るやうになる。さてさて上人はえらいお人ぢゃと前口上に僕を乗り気にさせて置いて、ぽんぽんと手を叩き、これよ女中衆、料紙を持ってござれ。

坊さん料紙硯を引寄せ、不器用な蒸湯の見取図を書いて説明に及ぶ。

これがなかなか面白い。ソレこれで図面が出来上がりました。よろしいかな。仮に貴君がお入りするとする。入るには一人中から出んければ入れんのじゃから、それを待ってからお入りするのじゃ。一の場が空いてますよって、足を入口の方にしてかう横になる。手探りをすると一の石が転がって居ますぢゃ。中に燈明は点とる筈ぢゃがそれも時には点らぬ事もある。また点っても人の身体、薄白く見ゆるか見えん位ですよって、十六の石は手探りにせん事には見つかりませんぢゃ。一の石を探ったうえそれを枕に寝ておいでるうち、そろそろ二番の人が動いて三番に移りますわい。二番の人が三番に移るには三番の人が四番に、四番の人が五番にと移らにゃなりませぬ。それを推して行くと十五番の人が十六番に、十六番の人

が外へ出るといふ順序になりますぢゃ。よろしいかな。そこで二番の場所が空いたと見ると、貴君がそこへお代りするので、それから順押しに、十六番まで寝て通りますぢゃ。また此の図面の通り九番では真中の石の柱の方を枕にして寝る。一番と十六番はあちやこちやに並んで寝ますぢゃ。それでないとどだい窮屈で二人寝られませんわい。また、十六番が一番のやうに寝ては入口を出るとき尻から出んければ出られん事になりますでの。この通り蒸湯の中は十六人で寸分の隙もなく詰るところ面白うおすと。なるほど坊さんの説明頗るわが意を得たるものがある。

坊さん、なほ続けていふ。不思議な事には、中で不浄な事があるときっと湯が冷えきりますのじゃ。愚僧の時代にも三度ほどありました。十年ばかり前になりますがの、男女の不埒がありましてな。其が何うしても離れません。その時も湯が悉く冷え切りまして、三日三夜大祈祷をやりましたじゃ。此頃は滅多にありません。何しろ信仰が強いよってそんな馬鹿ものは十年に一人ともまア出ませんわい。上人の功徳は有難い事じゃ。南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛。

▲入口を塞ぐ白いもの—これはと辟易

坊さんの話を聞くと何うしても蒸湯へ入って見なければ得心が出来なくなる。どうです寝際に入って来やうじゃ有ませんかと日名子さんに相談すると、いや是非お伴をしましょう迷惑そうにもなくにニコッかれる。やがて九時の時計が鳴って加藤さんが帰られると、僕は日名子さんを急立て蒸湯へこそは

蒸湯の建物は普通の共同温泉と形式において、大差はない。そして入った左手は普通の浴槽になって居て燻ぼった洋燈が一ツ点り、これにも四・五人の男女が気楽らしく入って居た。この浴槽の右手が有名な蒸湯で、すっかり自然石で畳まれてあるらしい。僅かに十六人を容るるだけだから無論大きいものではない。不細工な畳方で古び切っているから、その外観たるや頗る見すぼらしいもの。其上入口の処に間中の筵が下がって居て、そのまた筵がすっかり水気を含んでところどころ解れて居るのだから、一寸川流れの古筵を拾って来てぶら下げたといふ

形だ。その間中の筵の上に薬師様が祭られてござる。お燈明、線香、蝋燭のやうなものが点って御厨子の中は真黒に燻ぶって見ゆる。僕は何だか古筵を潜るのが心細くなった。日名子さんは何とも言わぬが大分辟易して居らしい。それでも「入りますか」と尋ねて見ると、「入りますとも」と景気がない。

そこで二人は着物を脱衣場に脱いで真裸になると、宿屋から案内してきた男が筵を上げて空いているかなと中へ声をかけて呉れる。中から空ちょる空ちょるといふ声が湯気と共に漂渺として漏聞える。一寸こゝで註釈を入れるが此の蒸湯の最も混雑するのは春先で寺札の出るのはその時だが、今は一番暇な時だから寺札も何も入らずに勝手な時に誰でも入れるのだ。

僕が先に立って、何の逡巡うところもなく例の筵をサッと揚げ、景気よく入ろうとすると、さうはいかん中が真闇なのだからだぢだぢとなり、蛙のやうな格好をしてそろりそろり這ふやうに入る。と何か目の前に白いものが茫乎見える。通り路にあるのだからこれはいかんと踏とまって、じッと正体を見詰ると女の尻だ。これはと辟易、後退りに筵を潜ると、どうしたんですと日名子さんが怪訝な顔をする。どうも女の尻が支へて入れませんよ。と僕はその時大真面目だった。

日名子さんは吹き出したいやうな顔を堪へて、それでは私がご案内しませうと今度は先に立って入る。僕は大分好奇心を以て日名子さんの後から続いて入る。日名子さんが故障なく入るところを見ると女の尻はどこかへ収まったらしい。空てるかなと、日名子さんがまた闇い中へ声をかける。中から爺さんらしい声でまた。空ちょる空ちょる。

▲僕の実験　南無阿弥陀佛

日名子さんは手探に進んで行くらしい。と爺さんの声で、「女中さん、柱のとこをかたげて入りなはれ、そこが空ちょるでな、頭を踏んだらいかんで、足をこっちやへやりなはれ」と世話を焼いてる。僕の鼻先を塞いだ白い尻の持主がまだまごまごしてるらしい。日名子さんが「どこが空とるな」とまた声をかける。「こゝが空ち知ょるで入りなはれ」「二人はいれるかな」「二人でも三人で

も入れる。九人きりじゃに優に入れるで」。

爺さん、暗闇の湯の中を見通しのやうなことを云ってる。僕は何だか息が詰まるやうで堪らん。こゝが心棒どころだと思って、漸やく手探りに爺さんの傍へ入る。心得たもので例の十六の石塊をさぐるとあるある。これだなと思って引寄て見ると枕には頃合の格好をした石だ。やっとこなとまず落ついて尻を据える。丸石を敷詰めた上へやわらかい石菖を一面に敷いてある。丸石の間にはひたひたに温泉が来ている。日名子さんは爺さんの向ふッぺらの方へ入りこんだらしい。爺さん、僕が入り込んだと見ると親切に、「石に手拭を当てて枕にしなはれ、足を投出すと石畳の段々があるので、それに足をもたせなはれ」、そこで僕は云われるまま石を枕に仰向になっ手足を投げ出して見ると成程石畳へ足をかけられるやうになって居る。なかなか寝心地がよささうだ。

始めに覚えた息の詰まるやうな感じも次第に取れて、体の状態が不思議に蒸湯に適応するやうになって来るらしい。僕は爺さんからこの頃は暇だから順序も何もなく入れるので、番毎寝て廻るにも及ばず、勝手な時まで寝て居ることも自由だと話された。僕はその実順々に札所を打って廻りたかったのだが仕方がない。じっとこゝに落ちつく事と覚悟を極める。何でも五番か六番のところに居るらしい。

どうですと日名子さんの声がかかる。いゝ工合ですと答へる。実際頗るいゝ工合になって来た。鼻腔や咽喉、気管支が何とも云へぬ心持に湿される。どんな薬物吸入法だってこれほど完全には行なわれない。成ほど、気管支加答児などは一遍に癒るといふのも尤もらしく思はれる。その上身体中を汗が水のやうに流れ、過剰の那篤瑠謨塩分が盛んに排泄されるので身体が軽くなるやうに覚える。いよいよ愉快だ。そちこちに南無阿弥陀佛の声が聞える。僕の隣りで、爺さんが頻りにやっている。僕も何といふ訳なしにやりたくなる。有難い事じゃと呟いて居る婆あさんの声もする。成ほどこれほどに信仰されている蒸湯なら十六の石塊を取り出すものも無い筈だと思ふ。再び枕石に手を触てみる。ソモサンカこの一塊の頑石、古往今来幾箇の頭顱をか枕したであらう。仮に一日五十人の枕になったとしても、一年に一万八千二百五十

人、六百年には百万人以上といふ勘定になる。こんな事を考えるとこの石塊にも敬意を払はなければ済まないような気がし始める。大方半分は成仏してるだろう。

隣の爺さんはひッきりなしに南無阿弥陀佛をやって居る。僕は何か左の隣りが気になる。居るやうでもあるし居なやうでもあるし、一向見当がつきかね、びくびくもので足を出して見たら柔らかい肉に触れた。あっと驚いて引こませると南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛

▲青年と狐の話　羽室の十二妃塚

その夜はぐっすり寝こみ、翌る朝は熱の湯というのを試みた。清潔な共同温泉である。蒸湯のほうは硫黄泉だが、これは炭酸性単純泉で無色透明だ。宿屋へ帰って朝飯を食べてる中に加藤さんが見えた。僕と日名子さんと高橋さんと三人いづれも結束して加藤さんともども宿を出る。山越に芝石の温泉から血の池地獄を見て亀川温泉を訪ふ計画である。

一里足らずの山越えが僕にとっては最も趣味あるものであった。丁度初茸の出盛時分で小松山に分入っては取りもて進む。この間に案内の親父がいろいろの話をして聞かせる。その中にかういふものがあった。それはこの十日程前鉄輪の青年で今年徴兵適齢になるのが芝刈にでかけたまゝ、行方不明になったので、村民は手分けして付近の山を探したがかいくれ見当らぬ。三日四日は鐘太鼓で探し廻って過した。処が五日目の朝家人が起き出して見ると、その若者が不思議に寝床に入られてある。併し口も何も利けない。それは村長さんの加藤さんも保証したのだから決して作り事でなく、鉄輪の村民が鐘太鼓でこの青年を探し廻った事実には何の疑を挿むべきところもないのだ。併し、話はこれからがミスチカルになる。

件の若者は全く唖になって、少しも口が利けない。その上非常な衰弱で、身体には大分の熱がある。まさしく大病人の容態、これでは無論一人帰れさうな筈はないから誰かゞ連れて来たのだらうが、誰に連れて来られたのだか一向に要領をえない。ところが青年の身体のどこやらに毛が付着して居る。それが狐の毛なのだ。青年は今に大熱往来生死の境を彷徨っている。これが話の要点で—全く生水を吸取られたでござりますよ。狐の子を取っ

た酬じゃと云いますがそげな事ではござりません。全く因縁事でござりますよ。とこれは親父の結論であった。

僕はたゞこの面白い話に訳もなく興を催ほした。田舎へ来てかういふ話を聞いてると、全く現時代と何の交渉もない別天地へ来たやうな気になれる。お負に人里離れた山の中で聞くのだから面白い。こんな話を聞いている中に四方山に囲まれて谷間のやうな中に五六の人家のある仙境のやうな美しい里へ出た。羽室といふところで為朝が鎮西に流された時住んで居たところだといふ。やがて御霊の社に過ぎる。こんもりと椎の茂った丘で、為朝を祀ってあるのだが、社の後に十二妃塚といふのがある。苔蒸した五輪が十三立って居るが、為朝がこゝを出発する際十二の妃を殺して埋めたところだと口碑に伝へられて居る。またこの近所には為朝の家来の鬼が植たと云ふ鬼松といふ大木の松や、為朝の弓を射た跡などといふところがある。こゝを越てまた山一つ越えると芝石の温泉場だ。

▲芝石の瀧湯　―　亀川温泉場

芝石は僅か二軒か三軒の温泉宿と一箇の共同温泉及び湯瀧を有する外には一軒の茶店もない山間の小温泉場である。併しこゝの湯瀧は別府各温泉場中の髄一に位して高さ凡そ一丈ほどの温泉の瀧が数条落ちているが、湯瀧の前は急湍をなした清冽の溪水がさながら瀧の如く流れ湯瀧の水は之に濺ぎ、前面の岩には枝振面白き松が生えて居るので、すべてが絵の様な景色である。湯瀧の前面には何の遮ぎるものもなく開放されてあるので、淙々の音立るに溪の急瀬を眺めながら、自ら画中の人となって湯瀧を浴びる心持は殆ど譬へるものもない。

温泉は含鐵炭酸泉で、無味透明にして多少の渋味を有する。こゝも古い温泉場で、柴石といふ名のあるのはこゝの渓流から木の葉や枝の化石を産するためである。共同温泉は可なり清潔で、宿屋も丁度上の方に建て増などして居て、これ又可なりな温泉宿と見受た。僕は共同温泉に入って湯瀧に打たれて、湯瀧を斜めに見る対岸の亭に落ついて、初茸の吸ものを注文し、ビールを傾けた心持が未だに忘れられぬ。三日ばかり寝ころぶには実にいゝところだと思ふ。その代り食るものは非常に不自由だら

う。まあ缶詰でも持っていって辛抱するのだ。全く浮世離なれた山の中だから呑気と云ったらこの上なしらしく、女などは隠し処だけをちよと押へて温泉へ出入りして居る。湯瀧への途を通って居る。警察の干渉もなければ浮世の風も吹いて来ぬ。こゝは別府温泉場中でも離れた別天地であろう。

こゝの温泉場から溪を七八町下ると例の血の池地獄へ出るのだ。血の池地獄からまた下ると次第に田園が開け別府の海が見渡さるゝ。十二三町海に向かって進むと、立派な国道へ出て、左へ行けば浜田温泉場、右すればすぐ亀川温泉場である。亀川温泉場は里屋の温泉と称へられ御越町にあるので、別府を距ること一里余り海岸にあって後に丘陵を負い可なり景色のいゝところだ。泉脈は頗る豊富で温泉宿は三十三軒ばかりある中に、むろや、柴木屋、平山旅館、計屋等有名である。いづれも木賃本位で費用等は別府より大分安上りにつくらしい。温泉も三四ケ所にあるが西の湯といふのが最も名を知られて居る。熱海、道後、有馬と併せて日本の西名湯だといふので、その名があるのだと温泉縁起には記されてある。泉質は無色透明の炭酸性食塩泉である。また新湯といふのには砂湯・瀧湯・蒸湯の設備がある。どちらも別府の共同温泉に対して遜色がない。

▲堀田温泉場　―観海寺温泉場―　観海寺地獄

亀川から一度別府へ帰って、次の日また日名子さんや高橋さんに連れられ、堀田と観海寺の温泉へ出かけた。堀田温泉は鶴見岳の東の麓にあって別府から凡一里十丁のところに位する。可なり高處になって居るが此邊の田の中や溪間には處々に硫烟を噴出するところが多い。所謂る堀田地獄はこれであるが、坊主地獄や紺屋地獄の如く大なるものはなく、唯地獄の小標本たるに過ぎぬ。こゝの温泉は単純の硫黄泉であるが、不思議な事には、地を掘れば到るところに地獄が湧出するに拘はらず冷泉である。冷泉を温泉と呼ぶ事は聊か矛盾して居るやうだが面白いのは地獄の火気をこれに通ずると訳もなく温泉になって了ふ事で、浴場にはちゃんとこの設備が出来て居るのである。この点において余程変わった温泉たるを失はぬ。戸数は僅かに十五六、旅館は金田屋、濱屋、萬屋外二戸

でいづれも木賃である。家々地獄の火気を引いて竈に用居ている事は鉄輪と同様である。この地獄の竈で蒸してくれた衣かつぎ芋と枝豆を御馳走になったが、この衣かつぎは紺屋地獄の枝豆同様まさに特筆大書すべき味であった。

鶴見嶽の頂上までこゝから二里ばかりであると聞いて大いに登って見たかったが、まず服装から変えてかゝらねばならんから止した。今も頂上近く白烟を吐て居るので、大分探険者があるそうだ。延喜式の火男火売命の鎮座されてあるは此山である。

こゝから観海寺へは山腹を横ぎって二十丁ばかりである。途中観海寺地獄を見るため、数丁ほど山を分上る。その山上に地獄があるのは慥かに火山の噴火口を聯想せしむる。併しこの地獄も坊主地獄の小なるもので、鉄輪地方の地獄めぐりをして来た眼には一向驚ろく程の事がない。こゝで卵子と枝豆を茹て食ふ。お手許を拝見されてからは、地獄はきつと枝豆がついて廻る事になった。上の田の湯の温泉といふのが近所にある。そこを出て数丁下ると観海寺温泉場だ。

別府温泉から直接に来れば一里足らずで、これも鶴見山腹の高處にあるのだが、それでも下までは別府から俥を通ずる。眺望においては別府諸温泉場中の第一位に位し、先年皇太子殿下御巡遊の際もこの眺望を御覧に供するため御野立所を設けた位である。

温泉は無味無臭無色の炭酸泉で、飲用水にも皆なこれを用ゆる。お客が来ればまづまづこれに炭酸泉を進める。飲んで見ても味がないから白湯と少しも変らぬ。茶もこれで入れて味が変らぬ。それで温泉は極めて効験ありと傳へられて居る。旅館は松屋、坂本屋を始めなかなか宏壮なのがある。その外に五六軒あって、大抵内湯がある上に共同温泉が一個所ある。土地の高燥なると空気の清新なることを最も特色とする。

▲別府温泉脈

別府付近の山はいづれかみな火山ならぬはない。四極山も旧火山である。實相寺山も旧火山である。男鹿山、雛戸山、立石山、鍋山、硫黄山、高の平山、扇山いづれか新旧火山でなきはなき中に、その尤も大なるものとし

ては鶴見岳及び豊後富士の称ある由布ケ岳がある。貞観九年には鶴見岳鳴動爆発して非常なる惨害を逞うした。降って慶長七年また大震動があって、別府湾内にあった瓜生島といふのが全く沈没して了った。併し慶長以後はさしたる惨害もないので、最早此上大鳴動を来すやうな事もあるまいとまず極札がついて居る。尤も今でも地震は多い。夜中など時々地鳴のする事がある。夫でも馴れたもので別府の人は何とも思って居ない。

かういふところであるから温泉がそちこちに湧出するのも不思議はないので、併しどこを掘っても温泉が出るといふものでは無論ない。それには温泉脈といふのがあって、温泉脈を掘当てなければ決して温泉の出るものぢゃないが、別府付近にはこの温泉脈が豊富にあるから、どこを掘っても温泉が湧くやうな感が起こるのである。例へば別府で云って見ても二条の温泉脈が走って居て、別府濱脇の諸温泉はみなこの脈の上に配列されて居る。この脈を外れたところはいくら別府でも温泉は湧出せぬのだ。別府はどこを掘っても温泉が出るやうに思ふ素人観は実際には間違って居る。

また別府付近の温泉は色々その質を異にし、その点において他温泉場に見られぬ特質を持って居るが、これは噴火口若くは瓦斯噴孔に近く湧出する硫黄泉に属し、稍これを遠ざかる随って炭酸泉となり、海岸に湧出するものは食塩泉となるものと見れば、大体に於て間違いはない。併し地盤の関係やいろいろによって別府の町の中にも硫黄泉が雑って居るといふ風になって居るから、一概に噴火口との距離で極める事は出来ない。それで別府に湯治に来るものは只の保養客はどうでもいゝけれども、身体に故障があって来るものなれば予じめ医師と相談し、硫黄泉なら硫黄泉、炭酸泉ならば炭酸泉といふ風に極て来て、それぞれの湯へ入らなければ折角別府へ来ても、その効は少ないといふ事になるだらう。これは僕が婆心から注意して置く。